

課題名：COVID-19後遺障害に関する実態調査（中等症以上対象）

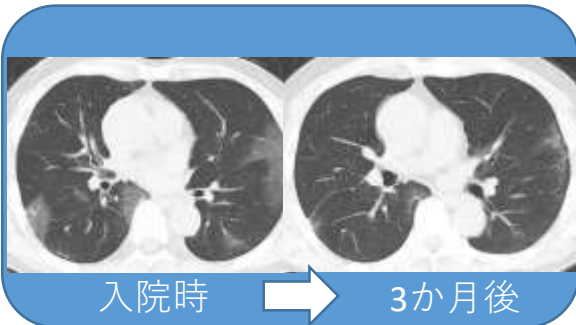
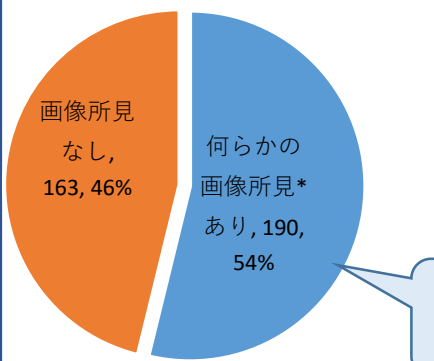
中間集計報告

研究代表者：日本呼吸器学会理事長/高知大学教授 横山彰仁 研究分担者：陳和夫、高松和史、金子猛、小倉高志、迎寛、野出孝一

研究目的： 呼吸器感染症であるCOVID-19については、未だ回復後の経過については不明点が多い。本研究では、本国における中等症以上のCOVID-19の、特に呼吸器関連における他覚・自覚症状の遷延（いわゆる後遺症）の実態とその予測因子を把握する。具体的には、① COVID-19回復後の肺CT画像所見、肺機能、及び自覚症状の経過の実態把握、②肺機能の低下やその他の症状の遷延を予測する因子（バイオマーカーを含む）の検索、③心臓への影響調査（潜在性/顕性の心筋炎や心不全）を行う。

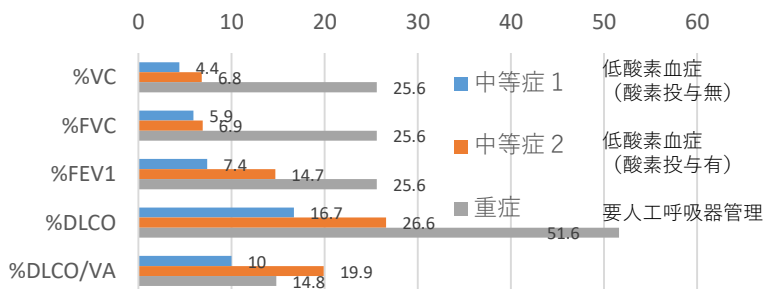
対 象： 2020年9月～2021年5月にCOVID-19で入院した967例 ※引き続き前向きに収集予定
※中間報告の対象は、上記中、退院から3か月以上経過した**512例**（男性371例、女性141例、年齢62±13.6歳）

退院3か月後の肺CT画像所見 (353例/512例中)



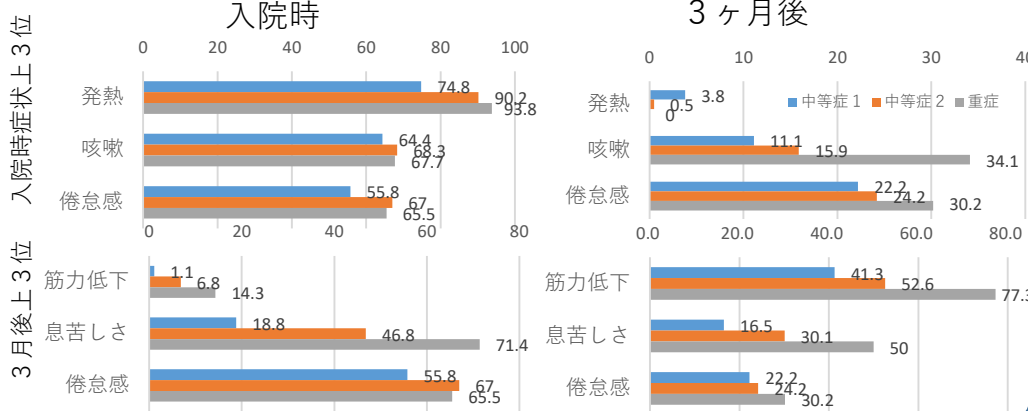
*何らかの画像所見があるとは、すりガラス影、索状影、炎症性変化といった、CT画像上で捉えることのできる肺の変化が見られた場合を指す。

重症度別の肺機能検査結果： 検査値が健康な人の80%未満の値になる割合



* VC:肺活量、FVC：努力肺活量、FEV1：1秒量
DLCO：肺拡散能、VA：肺胞換気量

重症度別入院時症状と3か月後自覚症状の比較、上3位



<退院3か月後の肺CT画像所見（353例/512例中）>
画像所見は遷延することが多い ⇒ 詳細は今後解析予定
（※）肺炎の名残りを示唆する何かしらの画像所見を認めることは現在治療が必要なことは異なる。臨床症状と画像所見は必ずしも一致せず、画像所見の臨床的意義は低い

<肺機能検査>
肺機能低下の遷延の程度は重症度に依存、肺拡散能が障害されやすい

<自覚症状>
発症急性期に多い症状と3ヶ月後に多い症状は傾向が異なる
遷延症状のうち、筋力低下と息苦しさは明確に重症度に依存

<今後の方針>
時間とともに症状の遷延は改善すると想定するが、3か月ごとに調査を継続し経過を明らかにする（本研究が令和4年3月で研究終了後は日本呼吸器学会においてそれぞれの症例について最大1年間観察予定）

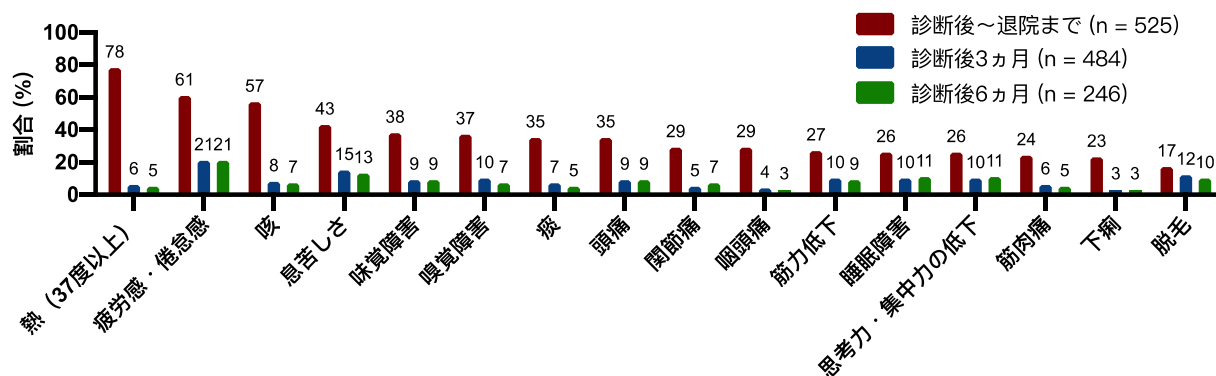
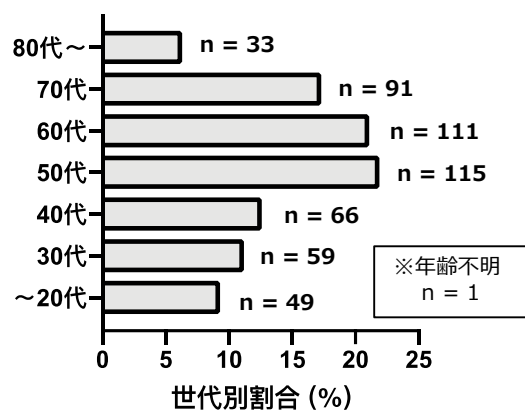
課題名：新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の 長期合併症の実態把握と病態生理解明に向けた基盤研究

中間報告

研究代表者：慶應義塾大学呼吸器内科教授 福永興彦 研究分担者：石井誠、寺井秀樹、南宮湖

- 研究目的：** 本国におけるCOVID-19の長期に遷延する症状の実態は不明点が多く、COVID-19に対する社会的不安の一因にもなっており、その実態解明及び病態生理の理解は急務である。本研究は、本国におけるCOVID-19の長期合併症の実態把握を行う。
- 対象：** 2020年1月～2021年2月にCOVID-19 PCRもしくは抗原検査陽性で入院した525症例（男性323例、女性199例、性別不明3例）
※引き続き前向きに1000例収集予定
- 方法：** 関連する診療科の専門家の意見を統合した症状に対する問診項目を網羅的に作成し、研究対象から自覚症状について回答を得た。国際的に確立した各種質問票を用いた多面的かつ高精度の調査研究を行う。

入院時年齢分布(%) 525例

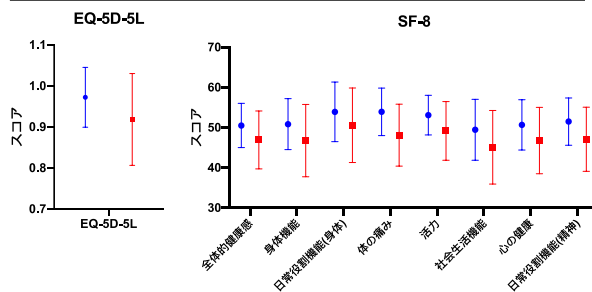


・疲労感・倦怠感、息苦しさ、筋力低下、睡眠障害、思考力・集中力低下、脱毛に関しては退院時までに認めた患者の3割以上が診断6ヵ月後でも認めており、遷延する症状と考えられた。

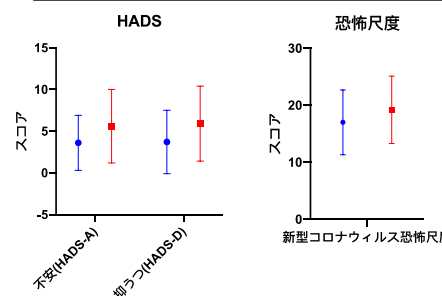
症状が精神的,社会的 活動に与える影響

- 遷延する症状 無
- 遷延する症状 有

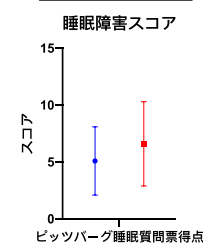
QOL (Quality of Life, 生活の質)



不安,抑うつ,恐怖



睡眠



- 遷延する症状が1つでも存在すると、健康に関連したQOLは低下し、不安や抑うつ及び新型コロナウイルスに対する恐怖の傾向は強まり、睡眠障害を自覚する傾向が強まった。
- 遷延する症状の有無に関わらず、診断6ヵ月後のアンケート結果から、約8割の方は罹患前の健康状態に戻ったと自覚していた。
- どのような症状の遷延がQOL低下や精神症状の程度に影響を与えるかは今後解析を進めていく。

課題名：新型コロナウイルス感染症による嗅覚、味覚障害の機序と疫学、予後の 解明に資する研究

最終報告

研究代表者：金沢医科大学耳鼻咽喉科教授 三輪高喜 研究分担者：記載省略

背景と目的：新型コロナウイルス感染症では、発症早期に嗅覚、味覚障害が発生することが知られているが、わが国における発生頻度と予後は十分に知られていない。本研究の目的は、わが国におけるCOVID-19による嗅覚障害、味覚障害の発生頻度や特徴を把握するとともに、どの程度の期間症状が持続するか及びその予後を把握することである。

対象：病院入院中、ホテル療養中の無症状・軽症・中等症のCOVID-19患者（20歳～59歳）の参加希望者

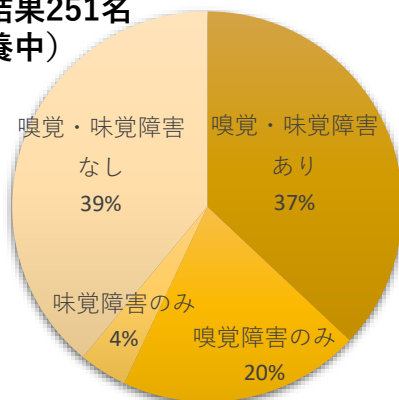
調査施設：石川県、東京都、千葉県、大阪府、愛知県の11病院、6療養ホテル

方法：参加希望者に入院、療養施設でアンケート調査及び嗅覚・味覚検査（検査キット使用）を行い、嗅覚・味覚の点数付けを行った。嗅覚・味覚の自覚症状やQOLの変化について退院1ヶ月後にアンケート調査を実施した。（3ヶ月後、6ヶ月後にも実施予定）

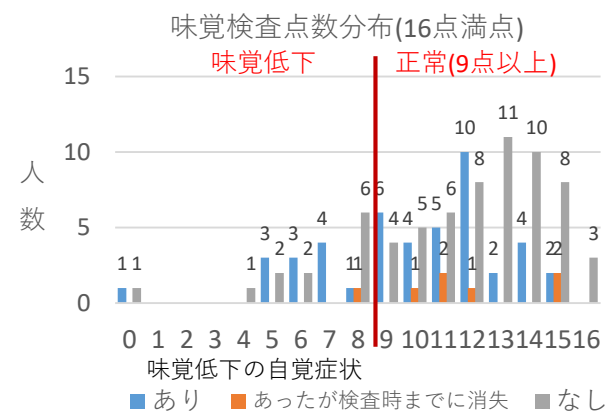
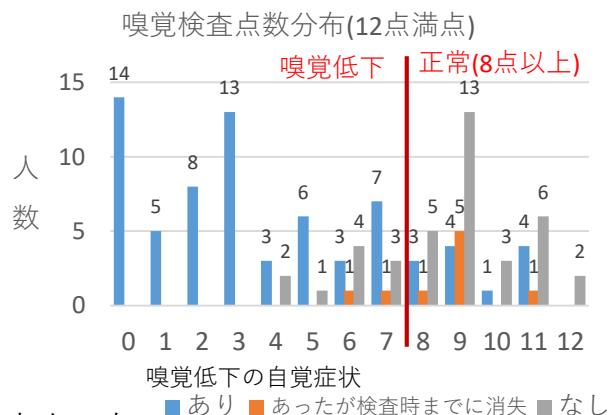
有効回答：アンケート回答者数251名、内119名に嗅覚・味覚検査を実施し結果が得られた

調査期間：2021年2月18日～5月21日

嗅覚・味覚の自覚症状についてのアンケート結果251名
(入院・療養中)



自覚症状に対するアンケート結果と嗅覚・味覚検査の点数分布(入院・療養中) 119名



●入院・療養中、味覚障害のみは4%と少なかった

●嗅覚障害を自覚する例の多くが嗅覚検査でも正常値以下を示したが、味覚障害を自覚する例の多くは味覚検査は正常であった

⇒多くの味覚障害例は嗅覚障害に伴う風味障害の可能性が高い

●1か月後までの改善率は嗅覚障害が60%、味覚障害が84%であり、海外の報告ともほぼ一致する

⇒味覚障害、嗅覚障害の症状は新型コロナウイルス感染症の治癒に伴い、大凡の人で**早急に消失**する

●QOLの変化については、食事が楽しめなくなったこと等に嗅覚・味覚障害と強い相関を認めた

●3か月後、6か月後の改善率は、本研究とは別にアンケートシステムで引き続き追跡する。(日本耳鼻咽喉科学会で報告予定) 3